

サバンナ

南 出喜久治

平成22年6月1日記す

動物園に行くとき、草食動物のシマウマ、肉食動物のライオンやハイエナなどがいます。これらの動物は、アフリカのサバンナ(草原)で、野生動物として住んでいましたが、捕らえられて動物園に連れてこられてからは、別々の檻に入っていて、お互いに顔を会わすことはありません。餌には不自由しませんが、檻の中で一生暮らします。

しかし、アフリカのサバンナで一緒に暮らしているときには、いつもこんなことが起こります。

ライオンがシマウマの親子のどちらかを捕まえて食べようと狙っています。シマウマの親子のうち、シマウマの子供は小さくて足が遅く、親から少し離れたので、ライオンは子供の方を狙うことにしました。そして、子供の後ろの方に気づかれないように回りこんで、そこから急に走り出して襲いかかろうとしました。すると、シマウマの親がそれにすぐに気付いて、子供を助けるために、子供とライオンの間に分け入るように走り出しました。そうです。親が囨となり子供を助けようとしたのです。初めから身代わりになるうとしたのではありません。子供を助けて自分も逃げて助かろうとしました。しかし、ライオンは、今度は親シマウマを狙って追いかけて、遂に捕まえてその首に噛み付き仕留めました。子シマウマは命びろいをしました。ライオンの家族は、親シマウマを食べます。

そして、ライオンが食べ残した親シマウマの肉は、ライオンが立ち去った後、ハイエナが貰い受けて食べました。

皆さんは、このサバンナで起こったことをどう思いますか。シマウマの親子がかわいそうだと思いますか。犠牲になった親シマウマは馬鹿なことをしたと思いますか。ライオンは悪くて残酷だと思いませんか。ハイエナは狡いと思いませんか。

いろんな考えがあります。しかし、これが動物の世界の現実であり、動物の世界で日常的に起こることに、人間の判断で良いことと悪いことの区別をすることができるのでしようか。動物を殺して食べる方法の違いはありませんが、人間の方がライオンよりも残酷ではありませんか。捕らえられて動物園の檻に入れられ、餌を与えることを保護したとする人間の考えか。え方こそが残酷ではありませんか。いちど考ええてみてください。

さて、人間も含めて動物の世界は、サバンナでの暮らしのように、これまでずっとこのようにして生きてきたのです。生命を維持する本能によつて生きてきたのです。本能というのは、生まれたときから備わっている心と言つてもよいでしょう。その本能が悪いことであり、間違つたものであれば、人類も動物も、とつくに滅びていたはずで。

それよりも、このサバンナでの出来事で学ばなければならぬのは、親シマウマの行動です。シマウマには、人間のように、子供を助けなければならぬというようないかなる理屈による道徳観があるとは思いません。無意識に、とつきの判断で子供をかばつたのです。これは、まさに本能であり、理性とか理屈ではありません。動物は自分の命と体を守ろうとします。これを自己保存の本能といいます。そして、さらに、その命と体を投げ出してでも子供を守ろうとするのも本能です。これを種族保存の本能といいます。これは動

物の本能ぶつほんのうですから、シマウマだけでなく、人間にんげんにも備そなわっています。そして、自己保存じこほぞんの本能ほんのうよりも種族保存しゅぞくほぞんの本能ほんのうの方が強つよい本能ほんのうなのです。ですから、親シマウマは、より強つよい本能ほんのうによって子供こどもを助たすけたのです。そして、助けられた子シマウマが大きおおくなって、自分じぶんの子供こどもを育てるようになり、同じおなようなことが起おければ、また同じおなように子供こどもをかばうのです。あなたのお父とうさんもお母かあさんもあなたを守るまもるために同じおなことをします。そして、あなたも大きおおくなったら、同じおなことをします。順じゆん送りおくですね。

自分の命じぶんいのちと体からだが大切たいせつなことは当たり前あですが、本当ほんとうに勉強べんきようしてほしいのは、その命いのちと体からだをささげてでも守まもらなければならぬものがあるのかどうか、それは何なになのか、ということを見みつけることです。それが見みつけられれば、本能ほんのうが強つよくなって生きることの勇ゆう気きがわいてきます。